

【研究会抄録】

第28回島根新生児研究会

日時：令和6年2月4日(日) 9:20~13:00 (開場 9:00)

会場：島根大学医学部附属病院 ゼブラ棟2階だんだん
〒693-8501出雲市塩冶町89-1

島根新生児研究会顧問：島根大学小児科 竹谷 健

島根新生児研究会事務局：島根大学小児科 吾郷 真子

当番世話人：島根大学医学部附属病院 総合周産期母子医療センター 吾郷 真子

共催：島根新生児研究会・アストラゼネカ株式会社・島根大学

1. 胎児性アルコールスペクトラム障害

島根県立中央病院小児科

平出 智裕, 秋好 瑞希, 羽根田泰宏
山田 健治, 金井 理恵

妊娠中のアルコール摂取は世界中で問題となっている。胎児がアルコールに暴露されると、胎児性アルコールスペクトラム障害 (FASD: fetal alcohol spectrum disorder) が引き起こされる可能性がある。FASD は、認知行動力の低下や社会への適応困難などの神経発達遅滞を主症状に、特徴的な顔貌 (眼裂狭小, 浅い人中, 薄い上口唇) を呈する場合がある。生涯を通じてサポートが必要となるため、社会経済に及ぼす影響は大きい。今回、妊娠中に大量の飲酒を続けていた母親から出生した FASD 疑いの新生児例を経験した。妊娠中のアルコール摂取に関して、安全な量はない。また、妊婦本人の申告がなければ表に現れにくく、周囲からの情報で明らかとなる場合もある。FASD は避けることができる疾患であり、早期発見、診断、治療により予後が大きく異なる。そのため、妊娠中のアルコール摂取に関し、社会への教育や啓発のみならず、医療従事者も関心を持つ必要がある。

2. カンジダ性絨毛膜羊膜炎のため妊娠31週で早産となり、児に先天性皮膚カンジダ症とカンジダ肺炎をきたした一例

島根大学産科婦人科

原賀 光, 皆本 敏子, 中川 恭子
楨原 貫, 岡田 裕枝, 山下 瞳
石川 雅子, 折出 亜希, 金崎 春彦
京 哲

【背景】カンジダ性絨毛膜羊膜炎は有病率0.3~0.5%の

希少疾患である。今回我々は比較的典型的な一例を経験したため報告する。

【症例】35歳, 2妊1産, 体外受精にて妊娠成立した。30週5日に性器出血を認め外来を受診したところ頸管長23mmと短縮あり, 5~10分毎の子宮収縮も認めるため切迫早産として入院した。入院時の膣培養では *Lactobacillus species* 3+, *Candida albicans* 1+, *Candida glabrata* 1+ の検出あり。WBC 13,540/ μ L, CRP 1.47mg/dLと炎症反応上昇あり抗菌薬 (CTR 2g/日, CLDM 1,200mg/日, AZM 500mg/日) の投与を開始した。31週4日に胎胞膨隆を認め, 骨盤位であることから翌日に帝王切開術を施行した。児は女児で体重1,793g, Apgar score 4/8点, UmA-pH 7.301であり, NICUへ入室した。児は挿管管理となったがマイクロバブルテストは strong の結果で新生児呼吸窮迫症候群は否定的であった。臍培養と便培養から *Candida albicans* が検出され, 先天性皮膚カンジダ症とカンジダ肺炎と診断された。MCFG 6mg/kg を15日間投与し, 現在もNICU入院中であるが, 全身状態は良好である。胎盤病理所見では臍帯や羊膜表面にPAS染色およびGrocott染色陽性となる菌糸型の真菌を認め, カンジダ感染に伴う stage 3の壊死性臍帯炎と stage IIIの絨毛膜羊膜炎と診断された。

【結語】妊娠中の外陰部腔カンジダ症の発生率が高いが, その中で稀にカンジダ性絨毛膜羊膜炎をきたす例がある。未だ確立された出生前治療はなく, 早産や胎児・新生児死亡率が高い疾患ということを念頭に置いて, 診療にあたるべきである。

3. 当院の臍帯動脈血液ガス分析結果について

吉野産婦人科医院

吉野 和男

臍帯動脈血液ガス分析は、分娩時に胎児にアシドーシスがあったかどうかを客観的に評価できる方法である。2023年に当院で出生した妊娠37週～41週で出生体重2,500g以上の73例の臍帯動脈血のpH、BEについて検討した。pHの平均値は7.27で7.15未満が3例(4.1%)であり、BEの平均は-6.23mEq/Lであり、-8.2mEq/L以下は21例(28.8%)であった。全例APGARスコアは8点以上で、新生児の経過は正常であった。

産科医療補償制度の原因分析報告書要約版で以下のような症例の報告がある。「臍帯動脈血のpH7.037、BE-16.6mEq/LでAPGARスコアは1分後8点、5分後8点で、啼泣を確認後、皮膚色の戻りが悪いと判断したが、出生時より改善を認め、出生後より「カンガルーケア」が継続した。生後13分に皮膚色、筋緊張が悪化したため、看護スタッフは、インファントウォーマー上で酸素投与と刺激を開始した。生後16分に人工呼吸と胸骨圧迫を開始し、医師に報告した。」

臍帯動脈血液ガス分析ではpHとBEに注意しながら、新生児の経過を観察することが必要と思われる。

4. 当院NICUにおける動画を用いた教育への取り組み

島根大学医学部附属病院 NICU

岡村 京香, 峠田 奈穂, 門城すみ子
数森 和栄

当院のNICUでは、新人看護師や異動者への看護技術の習得への指導に際し、目的・手順をマニュアルに基づいて説明し、「見学」「シミュレーション」「実施」の3つのステップを順に踏み行っている。昨年度は、バイタルサイン測定といった看護技術だけでなく、中心静脈ルートやAラインなどの処置の一連の行為に、目的や留意点を加えた15分程度の動画を11種類作成し、新人看護師を対象に指導の際に活用した。実際の流れに合わせて作成したことで、一連の行為がイメージしやすく、何度でも必要な箇所が視聴できるといったメリットから、教育的な効果がみられた。

そこで今年度の取り組みとして、新人看護師や異動者には、看護技術や処置に対する具体的なイメージにつながる実践に活かすこと、他のスタッフには、統一した指導ができることを目的に、スタッフ全員で毎月1～2項目ずつの視聴を行ってきた。昨年度からの変更点としては、高度な技術を伴う症例は数が限られてくるため、実務経験を増やすために「見学」を「動画視聴」に置き換えた。

その結果、看護実践までの時間の短縮につながり、看護技術の習得数が増加してきた。

今年度は11種類の動画をランダムに視聴しているため、指導するスタッフ側の動画の視聴と、実際の指導とのタイミングが一致せず、動画での学びが指導に活かされているとは言い難い。しかし、新人看護師や異動者からは、「繰り返し視聴することができ、患児に直接実施する際の不安が和らいだ」「医師の動きがわかり、介助のイメージがつきやすい」、他のスタッフからは「復習になった」といった感想が聞かれており、教育のツールとして、看護技術の習得やその指導に一定の効果があったと考える。取り組み中の段階ではあるが、動画を用いた教育について報告をする。

5. 混合病棟における感染対策の徹底

益田赤十字病院 4東病棟新生児室

福原 孝子, 原田 幸子, 大石 麻早
新田 昌子, 三浦 史子

当病棟は産婦人科病棟(ターミナルを含む)であるが、分娩の減少に伴い他科病棟(眼科・内科・整形など)の患者が増え、患者層が多様化してきている。そのため応援体制をとり、新生児室・分娩・その他の成人病室を行き来し、連携して業務を担っている。また新生児室には、新生児スタッフだけでなく、産科・小児科医師、調乳スタッフ、検査技師、管理栄養士など他職種の出入りが多いのが現状である。そのため新生児室へ感染源を持ち込まない感染予防策の徹底が必要であり、かつ新生児室での感染対策の徹底が必要不可欠である。昨年度の培養検査対象患児において、34%の患児にMRSA検出された。近年の中でも検出率が高く、今年度病棟の現状を踏まえ、感染対策に取り組む必要があると考えた。活動前、スタッフに感染対策についての意識調査を行い、①スタッフ教育 ②環境整備(患者ゾーン・医療ゾーン) ③他職種・家族の協力依頼 ④手順の見直し ⑤患者ゾーンの個別化の5つの柱をもとに取り組んだ。その結果、培養検査対象患児においてMRSA検出が6%に減少した。

今回、標準感染予防策を再確認するにあたり、日常業務である沐浴やオムツ交換、保育器収容児の取り扱いにおいて感染的視点で見直しを行った。環境を整え、当病棟独自のベストプラクティスを作成し、感染について定期的に考える機会を継続していくことにしたので報告する。

6. 周産期メンタルヘルsteamで関わった育児困難の母への退院支援振り返り

松江赤十字病院 6階周産期センター・11階病棟

石原 朱里, 山下和佳奈, 佐々木裕美

近年、心理社会的問題を抱えた妊産褥婦が増加しており、当院でも様々な問題を抱えた妊産褥婦に対し、産科、小児科、精神科、医療社会事業課などの他職種が連携し、周産期メンタルヘルsteamとして支援を行っている。A氏は初産婦であり、妊娠38週で3,088gの児を経膣分娩にて出産した。入院時間診票や妊婦健診にて精神科受診歴があることや物忘れが激しいとの情報があったが、産後の入院生活では大きな問題はみられず、産後5日目に母子ともに退院となった。しかし、退院1週間後の2週間健診受診にて児の体重が生下時体重より23.7%も減少しており、著しい全身衰弱を認めた。児はすぐに小児科医へ診察依頼し、重症脱水のため島根大学に搬送となった。原因は、ミルクアレルギーであったことが後に分かったが脳へのダメージが大きく、今後の成長発達に影響が見られる可能性が高い。産科病棟を退院後児は嘔吐や哺乳不良の状態が続いていたが母は受診行動がとれていなかった。そればかりでなく母は、ミルクの作り方など育児行動にいくつかの問題が見られ、後の精神科受診で軽度の知的障害があることが判明した。その後児は当院小児科病棟へ転院となり、周産期メンタルヘルsteamで連携して両親への退院支援をおこなった。産科病棟で妊娠中や産後に母の問題を見つけられなかったケースとして振り返りを行うと共に小児科病棟での関わりについて報告する。

7. 産科領域でのグリーンケア

松江赤十字病院 6階西病棟

高木 若菜, 森田 祐奈, 山根志緒莉

当院産科病棟では、グリーンケアについてのマニュアルに基づき看護ケアを実施していたが、入院中に実施することがメインでありその後のフォローについては詳細な取り決めがなかった。また、グリーンケアの知識を得る機会が少なくスタッフがケアに自信を持っていない現状があった。そこで令和4年度のチーム活動としてグリーンケアをテーマにあげた。

病棟・外来で統一した継続的な関わりができるようなマニュアル作成、スタッフへのグリーンケアに関する勉強会の実施、以前から月1回実施している他職種参加のメンタルヘルスカンファレンスでの継続的なフォロー体制作り、パンフレットを用いた退院後の相談窓口の紹介、といった取り組みを実施した。

産科病棟では、死産・流産・人工妊娠中絶の方が悲嘆過程をたどれるよう「生まれてきた児をあたたく迎え入れ、家族の時間を作る。」「児に対して家族がしてあげたいと思う希望に添えるよう共に考える。」「児とのお別れの準備のお手伝いをする。」「産後の褥婦・家族の身体面、精神面の様子を外来でフォローする。」という内容でグリーンケアを実施している。

今回妊娠39週で子宮内胎児死亡となった方へのグリーンケアについて事例紹介を行い、産科病棟でのグリーンケアの具体的な内容や活動の成果について報告する。

8. 生下時に Collodion baby を呈した先天性魚鱗癬の1例

島根大学医学部附属病院小児科

徳毛 典子, 阿部 恭大, 竹谷 健

同 総合周産期母子医療センター

森山あいさ, 山本 慧, 吾郷 真子

【はじめに】collodion babyは先天性魚鱗癬のいくつかの病型で生下時にみられる症状である。先天性魚鱗癬では、新生児期の不安定な皮膚環境により二次感染を合併しやすい。早期から皮膚への介入を行い、二次感染なく良好な経過を辿った先天性魚鱗癬の1例を経験した。

【症例】在胎35週4日、出生体重2,304g, Apgar score 1分値8点, 5分値9点, 骨盤位の前期破水のため他院で帝王切開により出生した女児。母体は3妊1産。両親、同胞にアトピー性皮膚炎の家族歴あり。出生時より全身がコロジオン膜に覆われていたため、先天性魚鱗癬が疑われ、生後間もなく白色ワセリンを全身に塗布された。皮膚感染リスクを考慮され、アンピシリンを投与され、管理目的で当院NICUに転院した。日齢3にCRP陰性、びらんや発赤などなく皮膚状態が安定していたため抗菌薬を中止した。保育器での高加湿管理と白色ワセリンの頻回塗布で皮膚管理を継続し、適宜ステロイド軟膏や外用抗菌薬を使用した。眼瞼外反があり、ドライアイ予防に点眼液や眼軟膏を使用した。日齢15にかけて加湿を漸減終了し、白色ワセリンの塗布頻度も漸減した。コロジオン膜は緩徐に剥離し日齢30に完全剥離した一方で葉状鱗屑・角質肥厚が目立ち始めた。角質肥厚に伴い手指のわずかな可動域制限がみられたため、部分的なサリチル酸軟膏の塗布を開始した。明らかな皮膚感染なく、日齢37に前医へ逆転院した。後日、次世代シーケンサーによる全エクソーム解析でTGM1遺伝子変異を同定した。

【考察】出生後早期からの高加湿管理と白色ワセリン塗布は、コロジオン膜を緩徐に剥離させ、皮膚感染対策として効果的だった可能性がある。ドライアイに伴う結膜炎や角質肥厚に伴う運動制限などの合併症リスクがあっ

たが、早期介入により予防・加療できた。先天性魚鱗癬では、皮膚感染症をはじめ、様々な合併症管理に注意を要する。

9. 診療のため高次医療機関へ転院となったが治療を要さなかった2症例:

(1) 右膝関節脱臼が自然治癒した男児例 (2) 骨化頭血腫の女児例

雲南市立病院小児科

樋口 強

(1) 右膝関節脱臼の男児例

一般的に、先天性膝関節脱臼では、治療開始が遅れた場合の治癒率低下や合併症発生が懸念され、早期から外固定などで治療されるが、無治療での自然整復の報告は少ない。

症例: 在胎39週4日, 体重2,920g, 選択的帝王切開で出生。生下時から右膝関節が過伸展の状態であった。診療のため日齢1で高次医療機関へ転院となったが、転院前に右下肢は正常肢位となっていた。無治療で経過観察となり、以後も異常なく経過している。

(2) 骨化頭血腫の女児例

頭血腫は通常生後3か月以内で縮小するが、まれに骨化し長期経過をとる。整容上の問題などで外科治療が選択される場合があるが、自然縮小も報告されている。

症例: 在胎39週4日, 体重2,826g, 吸引はなしで経膈分娩で出生。生下時から右頭頂部に頭血腫を認めた。生後の経過は順調で、日齢6に自宅退院となった。1か月健診時に頭血腫が縮小しておらず、辺縁の不整な骨隆起を認めた。頭部CT撮影、頭蓋骨骨折と新規出血が否定できず、高次医療機関へ転院となった。骨化頭血腫の診断で経過観察となり、以後は頭血腫全体が骨化した。

10. 当科で施行した新生児手術を振り返って—2022年の経験

島根大学医学部附属病院小児外科

久守 孝司, 真子 絢子, 上野 悠

石橋 脩一, 人見 浩介, 船橋 功匡,

同 消化器・総合外科

田島 義証

2022年に、当科で行った新生児手術は16手術 (13人) だった。

市町村別内訳は、安来市1人, 松江市4人, 出雲市3人, 大田市1人, 江津市1人, 浜田市1人, 益田市1人, 県外1人だった。疾患別内訳は、先天性横隔膜ヘルニア2例, 肺葉外肺分画症1例, 腹壁破裂1例, 先天性食道

閉鎖症 (グロスC型) 1例, 先天性十二指腸狭窄症1例 (腸回転異常合併), 先天性小腸閉鎖症5例 (内1例は多発型), 鎖肛1例, 肥厚性幽門狭窄症1例, 左精巣捻転1例, などであった。

腹壁破裂+先天性空腸閉鎖症の症例は、3回にわたって段階的に手術を実施したが、術後に消化管の通過障害を繰り返した。家族の都合で他県に転居となり、患児が転院したため、その後の治療は他院に委ねられることになった。

2022年に経験した新生児手術を振り返り、症例や疾患の解説を行う。

11. 当科で施行した新生児手術を振り返って—2023年の経験

島根大学医学部附属病院小児外科

久守 孝司, 真子 絢子, 石橋 脩一

船橋 功匡

同 消化器・総合外科

瀬名波英子, 日高 匡章

2023年に、当科で行った新生児手術は23手術 (13人) で、2019年の27手術に続いて、過去2番目の多さだった。

市町村別内訳は、松江市1人, 出雲市6人, 大田市1人, 浜田市1人, 奥出雲町1人, 邑南町1人, 隠岐の島町1人, 県外1人だった。疾患別内訳は、先天性食道閉鎖症 (グロスC型) 3例, 先天性十二指腸閉鎖症 (狭窄症) 3例, 先天性小腸閉鎖症2例, 鎖肛4例 (内1例は総排泄腔遺残), 小腸型ヒルシュスプルング病1例, 臍帯内ヘルニア1例 (腸回転異常合併), 仙尾部類表皮嚢胞1例, 鼠径ヘルニア1例, などであった。

先天性食道閉鎖+先天性十二指腸閉鎖+低位鎖肛と複数の疾患を合併した症例や、食道閉鎖+18トリソミーの症例、複雑な疾患として知られる総排泄腔遺残の症例があった。また、新生児期に手術は行わなかったが、通常なら排便コントロールに難渋しない短域型ヒルシュスプルング病で、排便管理に難渋した症例もあった。

2023年に経験した新生児手術を振り返り、症例や疾患の解説を行う。

【特別講演】 (共催: アストラゼネカ株式会社)

「周産期の喪失とグリーフケア」

一般社団法人 山王教育研究所 臨床心理士

橋本 洋子 先生